

---

# ごちゃまぜ：その1

のみのみの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ごちゃまぜ：その1」

### 【Nコード】

N6393E

### 【作者名】

のみのみの

### 【あらすじ】

これから書こうと思っている小説の、予告編であったり、以前書いた小説の、サイドストーリー、つばいのだったり。まあ、これだけを読むのも、面白い、はず。「その1」とありますが、1話完結です。

僕は図書館で涼んでいる。

月曜日の朝九時過ぎ。いつもならば授業があるのだが、今週はすでに夏休みに入っている。

特にする事も無く、ボーっとしている。

宿題はすでに夏休みが始まる前に終わらせていて、本当に暇だ。

部活動に入っていれば、あるいは補講があれば、何かしらするべき事はあるのだろう。

だが、僕はそのどちらも無い。

もう一度言うが、本当に暇だ。

司書の人は、一ヶ月ほど前に新しくなった。なぜそんな時期に新しい人が来るかというと、以前の司書の人はこの学校で起こった殺人事件に巻き込まれて亡くなってしまったからだ。

犯人は、笹野原芽守（ひののはらめもり）という生徒で、彼女も自殺をして亡くなっている。

僕も事情聴取を受けた。と言っても、僕は一年一組なので、事件があった場所とは離れている。そのため、それ程大した事は聞かれない。

新聞部の発行した新聞に、推理を募集する案内があったが、僕はそういう事はするべきではないと思う。不謹慎だ。

これは、新聞部側も分かっているようで、一緒に書いてあった。

でもさ、分かっているならやるな、っていう話だよな。うん。

自分を納得させる。

司書の人は、司書室のような所でコンピューターとにらめっこをしている。色々忙しいのだろう。

僕は、しばらく寝る事にした。

腕を枕代わりにして、机に突っ伏す。そして、目を閉じた。

耳からは、バスケットボールが体育館の床に当たる音や、野球部

の元気な声、音楽部の綺麗な歌声が合わさって聞こえてくる。  
すやすや。

すや。

す。

と思いながら寝ようと思ったが、突然本能的な危機感を感じて立ち上がる。

数秒後、いきなり図書室の屋根が一部分落ちてきた。

幸いにも、僕の所からは離れていたので、無傷で済んだ。

図書室は五階にある。なので、屋上の床が落ちてきたことになる。しばらく煙が漂っていたが、次第に晴れてきた。

司書の人が近くに來たのが見える。

抜け落ちてきた部分には、日が丸く当たっている。その中央付近に、人が立っていた。

その人は、どうやら僕と同じ位の男子のようで、服装はこの学校の物だった。

僕は勇気をだして話し掛ける。

「ねえ、君は」

誰かと聞こうとしたとき、図書室の扉が乱暴に開かれた。

中に入ってきた女子は、同じくこの学校の制服を着ていた。

その女子が叫ぶ。

「ちょっと、いつまで逃げるつもりかしら。私に勝てると思ってるの」

その発言に、男子は黙っていない。

かと思いきや、黙っていた。

女子は、額に青い筋を立てていた。後になって考えてみれば綺麗な子なのにな、と僕は今、暢気に考えている。

「なに黙ってるのよ。こっちからいかせてもらうわよ」

そう言うやいなや、女子は手に持っていた杖を前に突き出し、何かを小声で言った。

すると、彼女の足下を中心に、魔法陣が現れる。青の蛍光色で、

最外部に二重の円。その内側にギリシア文字だかアラビア文字だか一周にわたって書かれており、さらにその内側には蔓つるの模様が書かれている。そして、中心部は、あれは、えつと。1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13。十三芒星か。そんな感じだった。

一方の男子はというと、いつの間にかいなくなっている。

と突然、女子が大声をあげた。

「アイン、ブリッツ」

ドイツ語か。そう思うやすぐに、あの穴の中心に一直線に雷が落ちた。

眩暈がする、と同時に、耳鳴りもする、と同時に、異臭もする。多分、オゾンの臭いだろう。嗅いだのは初めてだった。

「ちっ。逃げ足だけは、速いんだから」

女子はそう言うと、霧散して消えた。

なんだったんだろうか、あの二人は。迷惑だ。迷惑千万だ。

穴を覗いてみると、一階の床まで抜け落ちていて、地面が見えた。こうやって見ると、相当この五階は高い所にあるのだと、実感する。眩暈と耳鳴りが収まる。オゾン臭もいつの間にか消えていた。

僕は、一部が円形にくり貫かれた図書室を後にした。

理由は、暑いからだ。

外の空気が入ってきてしまい、中にいようが外にいようが変わらなくなった。それなら家に帰る。

階段を勢いよく下り、廊下をのんびり歩く。

途中、何人かの先生と出くわし、質問を受けたが、説明のしようがない。よって、こう答えた。

「司書の人に、聞いてください」

責任転嫁。いや、この場合は迷惑転嫁とでも言つのがいいか。

昇降口から外に出ると、バスが二台止まっていた。その周りには、女子生徒がうようよ。まるでゴ・・・、いや、前言撤回。言っただけで、撤回。

その女子に混じって、男が二人いる。  
一人は物理の先生。もう一人は生徒。  
まさに、紅一点ならぬ青一点。

ということでお分かりだろうか。えっ、分からない。何を聞きた  
いのが分からない。

では、質問。彼ら、あるいは彼女らは、何部でしょうか。

.....

黙っていても、誰も答えてくれる人はいなかった。

まあ、そりゃそうだ。口に出していないのだから。

彼ら、あるいは彼女らは、吹奏楽部、のはずだ。

これから合宿に行くのだろうか。

確か、長野県の菅平だったか。五日間の予定。

なぜ知っているかというところ、そのときなつみ苑崎夏見の友人だからだ。

夏見という名前から、女に間違えられやすいが、れっきとした男  
だ。

そう、あの青一点の点である、あの男子。あれこそが.....

ふう、だんだん考えるのも飽きてきた。もう止めて、家に帰ろう。

それにしても暑いなー。なあ、地球さんよ、ぜひ傘を差してくれ。

できれば可愛い傘をな。

そんな事を考えながら、帰途につくのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6393e/>

---

ごちゃまぜ：その1

2010年10月8日15時09分発行